

—茨城県土浦市—

小野大道西遺跡（第2次調査）

—国補公街委第1号市道新治I級14号線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

土 浦 市
土浦市教育委員会
株式会社東京航業研究所

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところであり、貝塚、古墳、集落跡等数多くの遺跡が存在しております。

遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなるだけでなく、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の偉業の一つでもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土土浦発展のためにも重要なことと思います。

このたびの小野大道西遺跡の発掘調査は、市内小野地区での土浦市による市道新治Ⅰ級14号線改良事業に伴い実施されたものです。

今回の調査結果、遺跡内では奈良時代を中心とした竪穴住居跡や多量の遺物を捨てた掘り込みなどが確認されました。この捨てられた遺物の中には、当時の天の川上流域で盛んに生産された須恵器と呼ばれる焼き物も多く含まれており、生産地周辺における数少ない発掘調査事例として興味深いものがあります。

本調査によって、市内小野地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立つことができずならば幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

土浦市教育委員会
教育長 富永善文

例 言

1. 本書は、茨城県土浦市小野 1378 番地所在の小野大道西遺跡（第 2 次調査）の発掘調査報告書である。
2. 調査は市道新治 I 級 14 号線改良事業に伴うもので、土浦市都市整備部公園街路課の委託を受けた株式会社東京航業研究所が、土浦市教育委員会の指導のもと実施した。
3. 調査地の所在及び面積、調査体制及び期間は以下の通りである。

所在地 茨城県土浦市小野 1378 番地

調査面積 201. 751 m²

調査指導 関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）

調査担当 小野麻人（株式会社東京航業研究所）

作業員 現地調査：宇田川清志 大竹信子 榊原良子 野口雅子 細田悦子 古川貴弘 吉田孝子
整理作業：宇田川清志 大橋正子 川村宜央 土屋隆行 馬場恵美 林 邦雄 古川貴弘
峯岸未以瑠 村山彩子




調査期間 現地調査：平成 21（2009）年 10 月 14 日～11 月 6 日

整理作業：平成 21（2009）年 11 月 6 日～平成 22（2010）年 3 月 12 日

4. 本書の編集・執筆は第 1 章第 1 節を関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が、その他を小野麻人（株式会社東京航業研究所）が執筆し、編集は小野が担当した。
5. 調査により得られた出土品と記録は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で保管・管理している。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第である（敬称略・順不同）。

茨城県教育庁文化課 今井千恵 斉藤弘道 佐々木藤雄 村山 修

凡 例

1. 本書における図面の縮尺は以下の通りである。
全体図 1：100 遺構平・断面図 1：60 カマド 1：30 土器、石器 1：3、1：1 大型土器 1：4
2. 遺構実測図中の座標値は公共座標（世界測地系）に基づく。方位は座標北を、レベルは海拔高を示す。
3. 遺構・遺物実測図中の表示は以下の通りである。
● 土器  カマド・カマド袖  焼土・火床面  赤彩
4. 遺物の注記に使用した略号は以下の通りである。
OMW 2（小野大道西遺跡第 2 次調査）
5. 遺物・土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準土色帖』（2001 年度版）に拠っている。
6. 遺物観察表における法量の 〈 〉 内数値は現存最大値、〔 〕 内数値は復元実測値を示す。

目 次

序

例言 凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 小野大道西遺跡の既存調査	5
第3章 調査方法と成果	7
第1節 調査の方法	7
第2節 基本土層	7
第3節 検出された遺構と遺物	7
第4章 総括	20
参考文献	21
抄録	
写真図版	

挿図・表目次

第1図 調査区の位置	1	第16図 第2・3・5・6・8号土坑	17
第2図 小野大道西遺跡と周辺の遺跡	4	第17図 第5号土坑出土遺物	18
第3図 小野大道西遺跡の既存調査	5	第18図 第1号溝出土遺物	19
第4図 小野大道西遺跡全体図	6	第1表 小野大道西遺跡と周辺の遺跡	4
第5図 基本土層断面図	7	第2表 縄文時代出土遺物観察表	9
第6図 第1・4・7号土坑	8	第3表 第1号住居跡出土遺物観察表	12
第7図 縄文時代出土遺物	9	第4表 第1号竪穴遺構出土遺物観察表	13
第8図 第1号住居跡	10	第5表 遺構外出土遺物観察表	14
第9図 第1号住居跡カマド	11	第6表 第5号土坑出土遺物観察表	18
第10図 第1号住居跡出土遺物	11	第7表 ピット一覧表	19
第11図 第1号竪穴遺構	12	第8表 第1号溝出土遺物観察表	19
第12図 第1号竪穴遺構遺物分布図	13		
第13図 第1号竪穴遺構出土遺物(1)	15		
第14図 第1号竪穴遺構出土遺物(2)	16		
・遺構外出土遺物	16		
第15図 第1号柱穴列	17		

写真図版目次

PL1 調査区全景	PL4 出土遺物(1)
PL2 調査前風景 第1号土坑全景 第4号土坑 全景 第7号土坑全景 第1号住居跡全景 第1号住居跡全景 第1号住居跡カマド 第1号竪穴遺構全景	PL5 出土遺物(2)
PL3 第1号竪穴遺構遺物出土状況 第1号竪穴 遺構遺物出土状況 第2号土坑全景 第3 号土坑全景 第5号土坑全景 第6号土坑 全景 第8号土坑全景 第1号溝全景	PL6 出土遺物(3)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は、土浦市都市整備部公園街路課（以下土浦市）が計画する市道新治Ⅰ級14号線改良事業に伴うものである。土浦市教育委員会（以下市教委）ではこの事業にかかわり小野大道西遺跡が存在することから、平成21年3月に埋蔵文化財の試掘確認調査を行なった。その結果、事業地内を東西に横切る市道新治北646号線の南北付近の土地において、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などからなる奈良時代から平安時代に位置付けられる埋蔵文化財が発見された。これらの埋蔵文化財が確認された土地のうち、先の市道南側の約200㎡については、平成21年3月下旬に市教委が発掘調査（第1次調査とする）を実施した。そして、先の市道北側の埋蔵文化財が発見された土地の扱いについては、土浦市と市教委の協議により、平成21年10月から11月にかけて第2次調査（今回調査）を実施することで合意した。この調査の実施方法は、土浦市が民間発掘調査会社に業務委託することで行うことになった。

今回の第2次調査に向けた事務的な手続きとして、土浦市から埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第94条第1項）が平成21年7月15日付けで提出され、市教委はこれを7月21日付けで茨城県教育委員会教育長宛に進達した。発掘調査箇所は、試掘確認調査で埋蔵文化財が確認された土浦市小野1378番地に所在する約200㎡の土地である。以前の試掘確認調査の結果、今回の調査対象地内ではカマドが設けられた竪穴住居跡1軒やこのほかにも竪穴住居跡らしい掘り込みが確認されていた。

今回の発掘調査の実施にあたっては、まず土浦市と株式会社 東京航業研究所が「国補公街委第1号 市道新治Ⅰ級14号線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託」契約を締結し、前二者に市教委を加えた



第1図 調査区の位置（1：6,000）

三者で「土浦市小野地内市道新治Ⅰ級14号線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結した。そして、株式会社 東京航業研究所から埋蔵文化財発掘調査の届出（文化財保護法第92条第1項）が9月11日付けで提出され、市教委はこれを平成21年9月14日付けで茨城県教育委員会教育長宛に進達した。

現地調査の実施にあたっては、平成21年10月9日に事業者・発掘調査会社・市教委が現地にて調査エリアの確認を行った。そして、現地における調査は10月14日から11月6日まで実施された。

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成21年10月14日から11月6日までの約3週間にわたって実施した。

まず、10月14日から15日に、作業用の駐車場の造成と表土除去作業を重機を使用して行い、ローム層上面において住居跡1軒、竪穴遺構1基、土坑8基、ピット13基、溝1条の分布を確認することができた。16日より、南端に位置する第1号竪穴状遺構や第2号住居跡上の第2、3号土坑、P1・2の調査を開始する。粘質土の地山と覆土は乾燥すると非常に硬化し、掘削は難航した。当初住居跡との想定がされていた第1号竪穴遺構は、カマドを持たず、また、収納箱3箱分以上の大量の土師器、須恵器が出土した。

21日より、平面形が不明確な第1号住居跡にトレンチを入れ、床面及び壁面の所在を確認する。翌日までの調査で、カマドを中心に東西南に壁面が確認され、カマド以外大半が削平されているとした当初の想定より、残存状態の比較的良好な遺構であることが確かめられた。26日は、台風による暴風雨により現場作業は中止となり、翌日は、冠水した遺構群の水汲みに忙殺された。28日より、第2号住居跡や土坑、ピット群の調査が本格化し、31日までにほぼ遺構の完掘となり、同日午後に全体図の写真測量を行った。11月2日に、全体清掃と写真撮影、第1号溝や第1号住居跡の未掘部分の調査を行う。これと併行して、一部撤収作業も開始。4日に基本土層の掘削と記録を行い、5日に遺構掘削の終了確認を受け、安全柵などの撤去と埋め戻しを開始。同日夕方には現場作業終了となり、最終確認を受けて発掘作業を完了した。出土した遺物は、奈良時代の土師器、須恵器を中心に、収納箱4箱分にのぼった。報告書作成のための整理作業は、平成21年11月9日より開始し、平成22年3月12日に完了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

小野大道西遺跡は茨城県土浦市小野1378番地に所在する。

茨城県南部のほぼ中央に位置する土浦市は、平成18年2月に、北西部に位置する旧新治郡新治村と合併し、現在の市域となった。

地理的な特長は、筑波山塊から南東方向に派生する北部の新治台地、南部の筑波・稲敷台地、その間に位置する古鬼怒川により形成され、現在は桜川の貫流する桜川低地に大別され、東部は霞ヶ浦（土浦入り）に面している。

旧新治村とつくば市、石岡市（旧八郷町域）の境界が接する、筑波山塊の南麓に位置する東城寺、小野地区は、三方向を筑波山塊の山裾に囲まれ、南方は東流する天の川によって形成された沖積低地が開けた小盆地状の地形をなしている。

小野大道西遺跡は、筑波山塊の裾から派生する標高42～36mの新治台地上にあり、北から南、東から西へと緩やかに傾斜している。西から南にかけては、現在も水田が営まれる沖積低地に面している。

この一体は、水田や畑地が整然と段状に整備されているが、近年の土地改良事業によるものであり、旧地形は緩やかな斜面を描いていたと思われる。調査前の現況は荒蕪地であった。

第2節 歴史的環境

旧石器時代の良好な調査例はなく、大畑本田遺跡や高岡根遺跡などで尖頭器やナイフ型石器が表採されているのみである。

縄文時代は、桜川と天の川に挟まれた台地縁部を中心に、早期の土器が採集された小高天神遺跡(2)、前期から中期の藤沢東町遺跡、中期から後期の大本田遺跡などが形成された。

弥生時代は、天の川中上流域の永井、今泉、栗野地区に原田遺跡群を中心とする後期後半の遺跡が多く、県内でも有数の当該期の遺跡分布が確認されている。原田遺跡群からは185軒もの竪穴住居跡が検出されている。本郷原山遺跡(5)からは、弥生時代後期後半の竪穴住居跡が7軒、田宮梶の宮遺跡(6)では、3軒が確認されている。

古墳時代は、原田遺跡群内で前期～中期の集落が確認されているほか、田宮梶の宮遺跡で2軒、岡の宮遺跡で5軒の竪穴住居跡が確認されている。また、大部分が開墾・土取りなどにより消滅しており詳細は不明ながら、小高の高崎山古墳群(7)、小高寄居古墳群(8)、沢辺地内の沢辺稲荷古墳群(10)、沢辺南方古墳群(11)、大志戸から本郷にかけての丘陵部に大志戸古墳群(9)や本郷原山古墳群(12)など、後期～終末期を中心とする群集墳が存在したことが『新治村史』に記載されている。南東に所在する根鹿遺跡からは、終末期の方墳が検出された。

小野大道西遺跡周辺は、律令制下では筑波郡三村郷(小野、東城寺、小高)に属していたとされる。奈良・平安時代の集落跡の発掘調査事例は非常に少ないが、須恵器窯跡、古代寺院などが所在する。

田宮梶の宮遺跡では、8世紀半ばと9世紀後半～10世紀半ばの住居跡7軒、南方700mの岡の宮遺跡では、8軒が確認されている。

根鹿遺跡では、8世紀後半から10世紀にかけての集落が発掘され、竪穴住居跡10軒や粘土採掘坑のほか、「佛」墨書をもつ須恵器の鉄鉢形土器、瓦堂、瓦塔片などが出土した4棟の掘立柱建物跡が確認され注目される。

小高・東城寺・小野地区を中心とした一帯は、「新治須恵器窯跡群」の所在地として知られている。天の川北岸の台地斜面から筑波山塊の山裾に沿って、西から小高窯跡(13)、田宮窯跡(14)、小高村内窯跡(15)、東城寺寄居窯跡(16)、東城寺桑木窯跡(17)、東城寺窯跡(18)、小野窯跡(19)、小野八百田裕窯跡(20)、永井寄居窯跡、栗山窯跡が確認され、さらに多くの窯跡があると推定されている。また、窯跡の分布範囲に関しても、さらに北東のかすみがうら市内の一丁田窯なども含めたより広域になることが指摘されている。

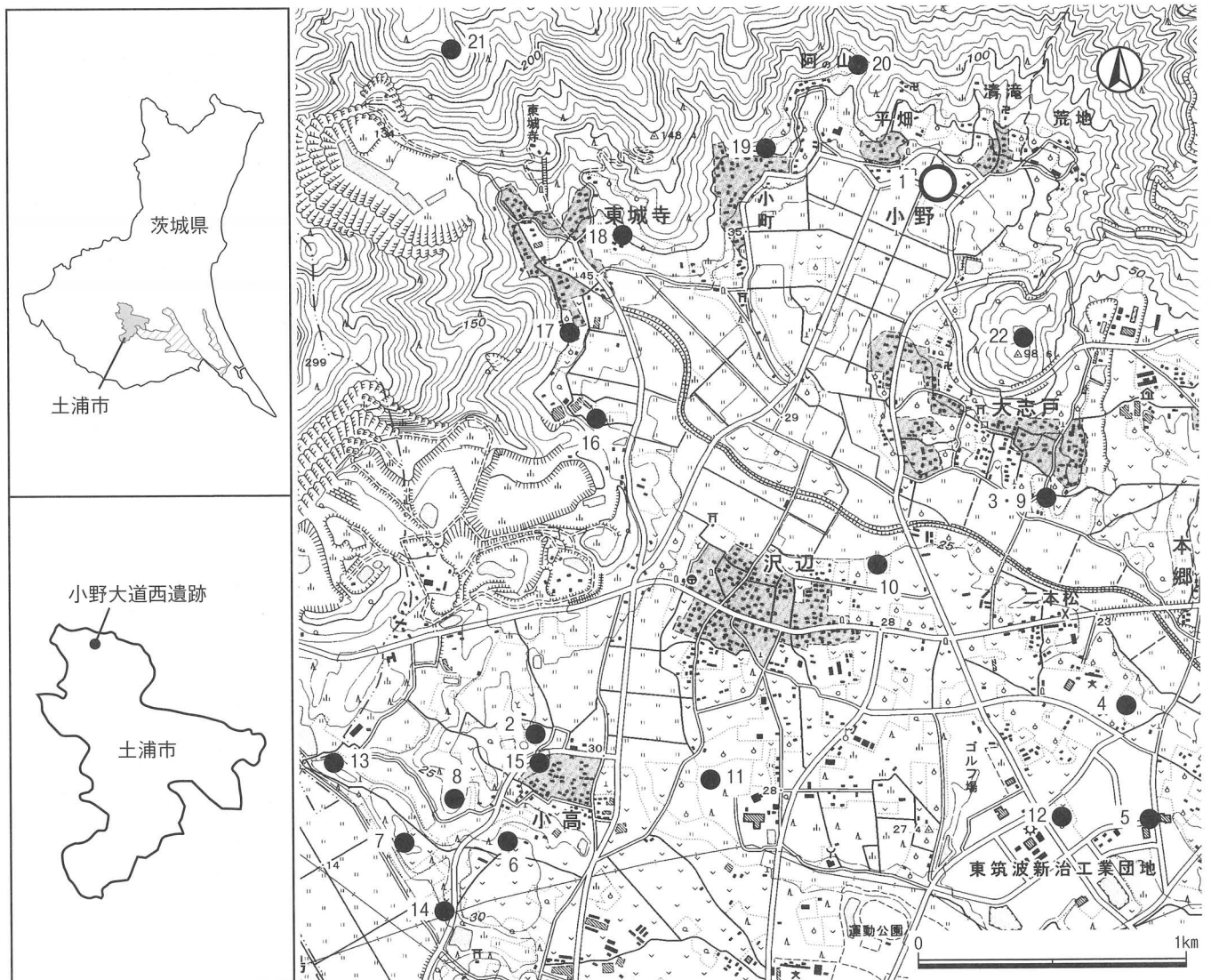
最も古い時期ものは、7世紀第4四半期に位置づけられる栗山窯であるが、さらに先行する未発見の窯跡があると推定されている。

西北西の山を越えた5.5kmの地点には、筑波郡衙跡である平沢官衙遺跡、南西7.5kmには、河内郡衙跡である金田西坪A遺跡、東北東10kmには石岡の常陸国衙跡が位置し、これらの官衙や付属寺院への須恵器供給がここからなされていたことは想像に難くない。そして、胎土に雲母を持つという特徴の新治窯産須恵器は、さらに常陸南部全域から下総北部、下野南東部、武蔵東端部まで、東関東一帯の広範な流通が認められている。

これらの事との関連性も想定されるのが、この地域に建立された寺社である。小野にある清滝寺は大同2

第1表 小野大道西遺跡と周辺の遺跡（国土地理院発行1：25,000『常陸藤沢』に加筆）

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	小野大道西遺跡	縄文・古墳・奈良平安	12	本郷原山古墳群	古墳
2	小高天神遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳	13	小高窯跡	奈良平安
3	大志戸台地遺跡	弥生・古墳	14	田宮窯跡	奈良平安
4	本郷町田向遺跡	縄文・弥生・古墳	15	小高村内窯跡	奈良平安
5	本郷原山遺跡	弥生・奈良平安	16	東城寺寄居窯跡	奈良平安
6	小高熊野塚古墳	古墳	17	東城寺桑木窯跡	奈良平安
7	高崎山古墳群	古墳	18	東城寺窯跡	奈良平安
8	小高寄居古墳群	古墳	19	小野窯跡	奈良平安
9	大志戸古墳群	古墳	20	小野八百田谿窯跡	奈良平安
10	沢辺稲荷古墳群	古墳	21	東城寺跡	奈良平安
11	沢辺南方古墳群	古墳	22	甲山城跡	中世



第2図 小野大道西遺跡と周辺の遺跡（1：25,000）

年(807)に徳一上人により創建されたと伝えられ、後世に通称「古観音」の地に移されたとされる。東城寺は延暦15年(796)の開山。日枝神社が大同2年(807)の勧請を由緒として持ち、古くから開けた場所であったことがうかがえる。

東城寺北方の朝望山中腹には、堂平の字名を持つ平場があり、軒瓦・平瓦・丸瓦・磚を出土する礎石建物跡が存在するとされ、古代の東城寺跡と考えられている(21)。

さらに、現在の東城寺の裏山には経塚群があり、平安時代の保安三年(1122)や天治元年(1124)銘の経筒が出土している。

中世に入ると、この地は大掾氏を経て小田氏の支配下であり、小田一族の小神野時義により築かれた甲山城(22)や、開発小領主層の城館跡が散在する。中世末には、小田・佐竹間の激しい争奪戦が行われた場所であった。

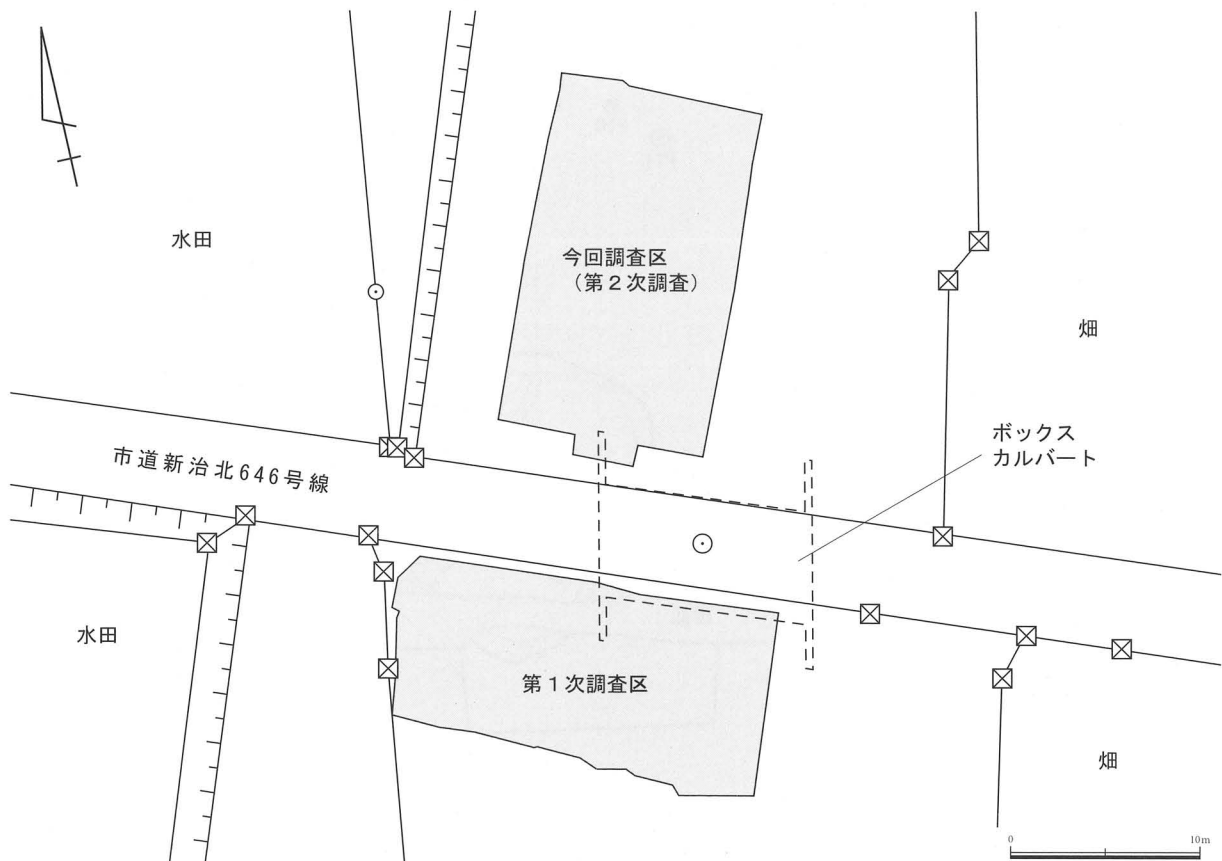
近世においては土浦藩領となり明治に至った。

第3節 小野大道西遺跡の既存調査

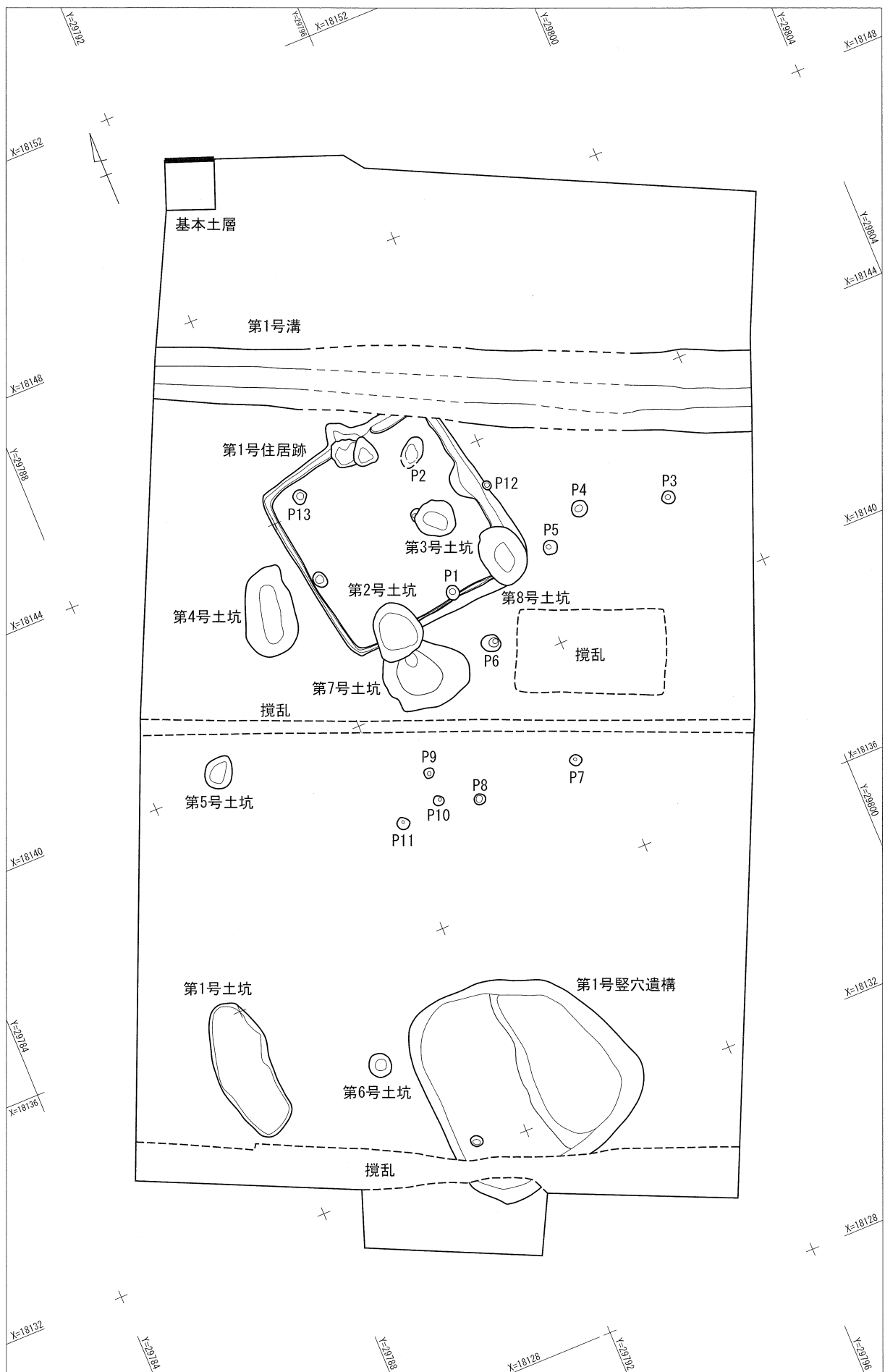
小野大道西遺跡は、分布調査では古墳時代と、奈良・平安時代の遺物が採集されている。

市道新治I級14号線改良事業に際し、平成21年3月に土浦市教育委員会により試掘確認調査が行われ、函渠設置予定地の市道新治北646号線付近の一部で埋蔵文化財が発見された。このため、同月に市道646号線の南200mについて市教委による発掘調査が行われ、柱間や主軸方向を同じくする、8世紀前半を中心とした掘立柱建物跡1棟や柱穴列跡3ヶ所、竪穴遺構1基、土坑2基などが検出された(第1次調査)。

今回の調査地点は、市道646号線を挟み第1次調査地点の北側にあたる約200mの範囲である。



第3図 小野大道西遺跡の既存調査 (1:400)



第4図 小野大道西遺跡全体図 (1:100)

第3章 調査方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査は、盛土予定地の函渠北側を中心に実施された。確認調査によって、住居跡2軒の存在が確認された地点を中心に、南北18.5m、東西11mの長方形の調査区が設定された。調査区の座標は、公共座標（世界測地系）を基準に設定した。

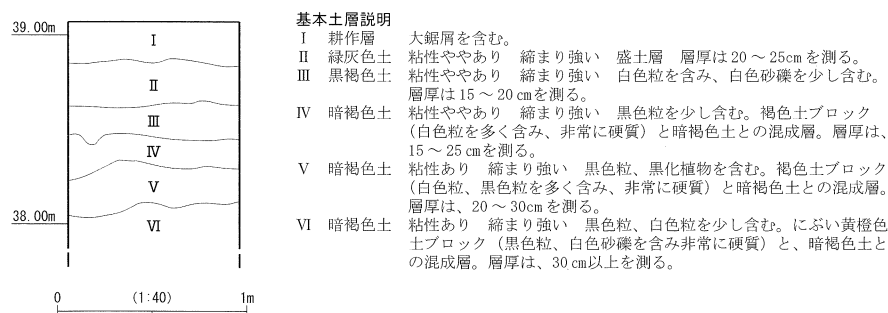
調査にあたっては、表土より厚さ60～70cmを重機による機械力で掘削し、その下部より遺構確認面までは人力で掘り下げた。確認された遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用して行った。写真撮影にあたっては、35mmカラーリバーサルフィルム、モノクロフィルム、デジタルカメラを併用し、適宜、記録撮影を行った。出土遺物については、表採資料および攪乱層からのものを除いて、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。

第2節 基本土層

調査区の北西隅にテストピットを設け、基本土層の観察を行った。I層及びII層は、近現代の耕作による大鋸屑混じりの腐食土層と近年の盛土層である。この下に位置するIII層からが本来の堆積土と考えられるが、一般的な台地上で見られる関東ローム層とは異なり、非常に粘性が強く、暗褐色に近い色調である。既に報告されているように、元々緩斜面上であった当遺跡の立地条件から、上層のローム層が流失している可能性が指摘されている（関口2009）

III層中では遺構の視認が困難であり、地表下約60cmのIV層上面を遺構確認面とした。この層より、変色した硬質の褐色土ブロックを多く含んでおり、或いはハードローム層に対比できる可能性もある。

なお、近現代と考えられる1号溝はII層上面より掘り込まれ、奈良時代の第1号住居は、III層中から確認できた。同住居の床面は、第1号竪穴遺構の床面と共に、V層中に構築されていた。縄文時代の落とし穴と思われる第4号土坑は、VI層まで掘り込まれていた。



第5図 基本土層断面図

第3節 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代

概要

土坑3基が確認された。調査区南西隅に位置する第1号土坑は、大半が削平されていたが、縄文土器片の出土から同時期の所産と思われる。西側に位置する第4号土坑は、覆土や形状から、縄文時代の落とし穴と思われる。第7号土坑は、同時期の木痕と思われる。

第1号土坑（第6図、PL 2）

調査区南西隅に位置する。削平により遺存状態は不良であり、確認面からの深さは13 cmに過ぎなかった。平面形は長楕円形を呈し、長軸260 cm、短軸107 cmを測る。主軸方位は、である。断面は皿状を呈し、壁は緩やかに掘り込まれている。坑底はやや起伏を持つ。覆土は単一層であった。

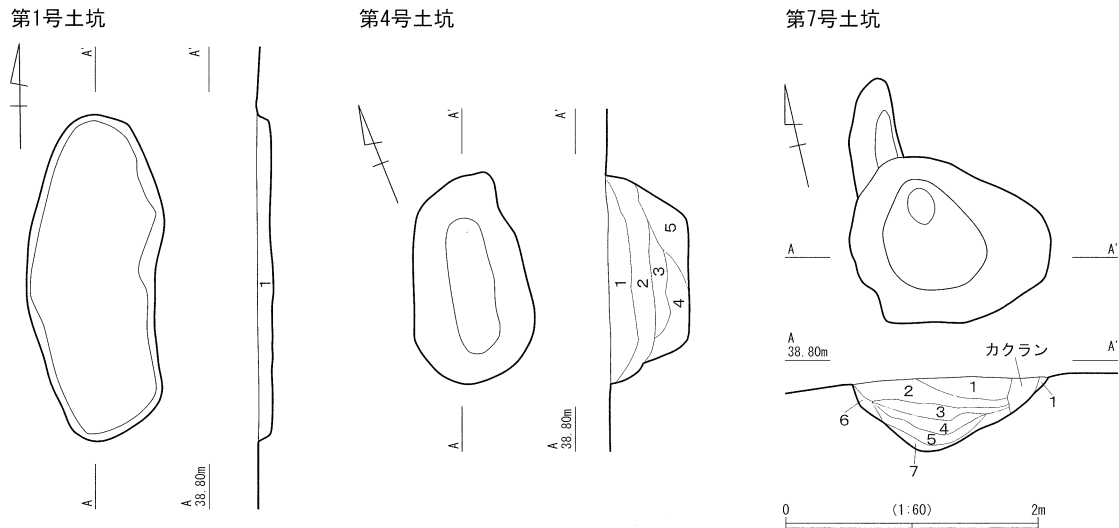
遺物は、縄文土器2片（1、3）が出土した。伴出土器から、縄文時代中期中葉の所産と思われる。

第4号土坑（第6図、PL 2）

調査区中央西端近くに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸163 cm、短軸98 cm、深さ61 cmを測る。主軸方位は、である。断面は逆台形を呈し、長軸側の壁は垂直に近い急傾斜で掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。覆土は硬く締まり、5層に分けられる。遺物の出土はみられなかった。覆土と形状などから、縄文時代の落とし穴と思われる。

第7号土坑（第6図、PL 2）

調査区中央、第1号住居跡に近接して位置する。上面の一部を第2号土坑と第1号住居跡に壊される。平面形は不整な長楕円形を呈し、長軸196 cm、短軸160 cm、深さ65 cmを測る。主軸方位は、である。断面は鍋底状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は起伏を持つ。覆土は7層に分けられる。遺物の出土はみられなかった。4号土坑と同様のしまった覆土と不整な形状から、縄文時代の木痕と思われる。



第1号土坑土層説明

1 暗褐色土 7.5YR3/3 粘性あり しまり強い ローム土を含み、白色粒を多く含む。

第4号土坑土層説明

1 黒褐色土 7.5YR1/3 粘性有 しまり強い 白色小礫を少し含む。
 2 褐灰色土 7.5YR1/4 粘性有 しまり強い ローム土を含み、白色小礫を少し含む。
 3 暗褐色土 7.5YR3/3 粘性有 しまり強い ローム土、ロームブロックを含む。
 4 褐色土 7.5YR3/4 粘性有 しまり強い ローム主体。黒色粒を含む。
 5 暗褐色土 7.5YR3/3 粘性有 しまり強い ローム土、白色粒を少し含む。

第7号土坑土層説明

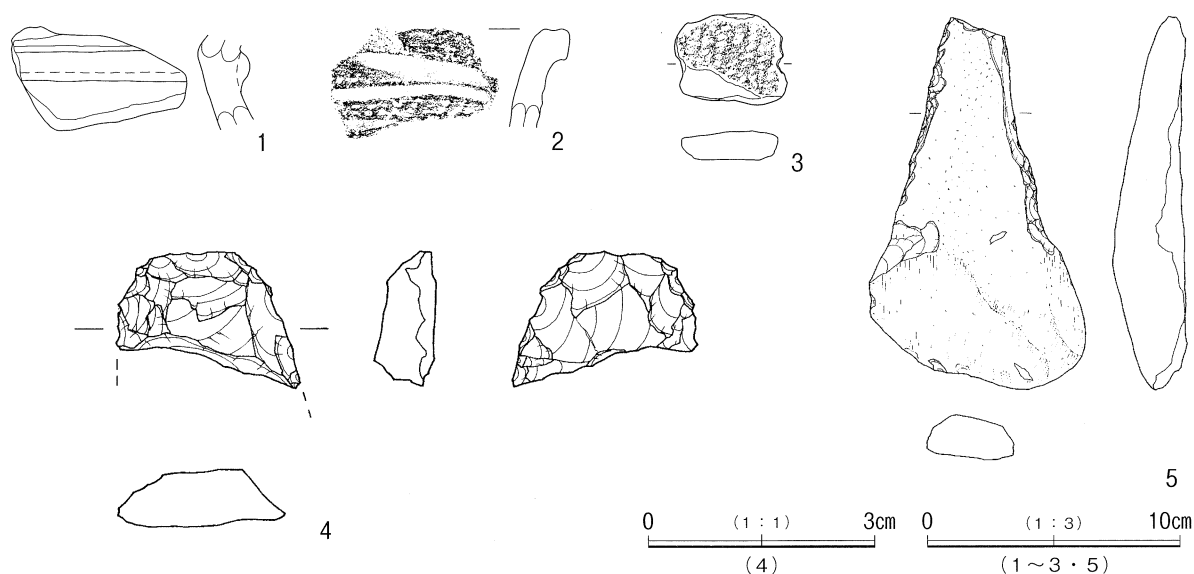
1 黒褐色土 7.5YR2/3 粘性有 しまり強い ローム土を少し含み、白色粒を多く含む。
 2 黒褐色土 7.5YR2/3 粘性有 しまり強い 白色粒を少し含む。
 3 極暗褐色土 7.5YR3/2 粘性有 しまり強い 白色粒、ロームブロックを含む。
 4 極暗褐色土 7.5YR3/2 粘性有 しまり強い 白色粒、黒色粒、白色小礫を少し含む。
 5 黒褐色土 7.5YR2/3 粘性有 しまり強い ローム土を少し含む。

第6図 第1・4・7号土坑

遺物（第7図、第2表、PL4）

縄文土器はいずれも中期土器の細片である。全体に磨耗が著しく、文様はやや不明瞭である。

1は筒状を呈す器形の口縁部破片。口唇部は肥厚し、口縁下に太い沈線文が施される。地文は粗い縄文である。2は頭部～胴部破片。くびれた頭部にそって隆帯と沈線文をめぐらす。3は土器片錘で、粗いLR縄文が施された胴部破片。一対の切り目を持つ。4と5は遺構に伴うものではないが、当該期のものと判断して掲載した。5は撥形の打製石器で、刃部の両面に磨耗が見られる。



第7図 縄文時代出土遺物

第2表 縄文時代出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)		器形の特徴	技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存度・備考	
1	1号土坑	縄文土器 深鉢	-	-	口縁部片。口唇部は平坦に調整し、内面下端に稜を有する。	外面：LR施紋、地紋上に横位の沈線紋二条。棒状工具で浅く幅広に施紋。 内面：剥落が著しく調整不明。	少量の石英、雲母、褐色粒	暗褐色	ふつう	中期中葉	
2	1号竪穴	縄文土器 深鉢	-	-	胴部片。横位の隆線を巡らし、上下端にナヅリ。	内面：剥落が著しく調整不明。	中量の石英、雲母	暗褐色	やや不良	中期中葉	
番号	出土遺構	器種	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	器形、技法	色調、焼成		備考		
3	1号土坑	土器片 錘	4.5	1.2	21.5	深鉢胴部片。粗いRL縄文を縦位置回転で施紋。内外面とも風化が著しい。	くすんだ褐色、ふつう。		切り目一対。中期中葉		
番号	出土遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考			
4	1号竪穴	加工痕 剥片	2.4	1.8	0.8	3.0	チャート	素材背面の周縁と腹面全体に二次加工			
5	確認面	打製石器	29.5	17	5.9	276.6	安山岩	撥形 大型縦長剥片素材 刃部両面に磨痕			

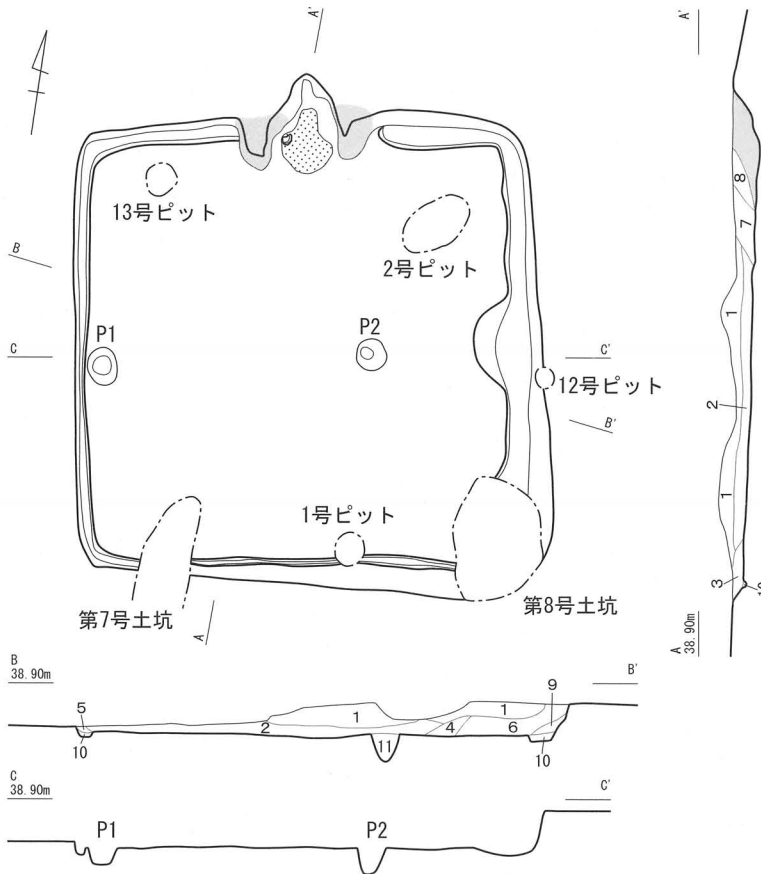
2. 奈良・平安時代以降

概要

竪穴住居跡1軒、竪穴遺構1、土坑3基などが確認された。調査区の中央部西よりに位置する1号住居 (SI-1) は、北西部にカマドを持つ平面がほぼ正方形のもので、遺物の出土は少ないものの、須恵器の坏から8

世紀前半ごろの所産と思われる。

ここから7mほど南西に位置する第1号竪穴遺構は、不整な方形を呈する平面形や床面の形状、カマドを持たない点などから、竪穴遺構あるいは、多数の遺物が投棄された様相で出土した点から、一種の廃棄土坑と推定される。出土遺物から、8世紀前半を中心とした時期の所産と思われる。この他の土坑、ピット群は、いずれも8世紀の集落形成以降のものと思われる。



第1号住居跡土層説明

- | | | | | | |
|----|------|----------|-----|-------|----------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 7.5YR2/3 | 粘性有 | しまり有 | 白色粒を多く含み、赤色粒、炭化物を少し含む。 |
| 2 | 褐色土 | 7.5YR3/4 | 粘性有 | しまり強い | 白色粒、赤色粒を少し含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | 7.5YR2/3 | 粘性有 | しまり有 | 白色粒を少し含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 7.5YR4/3 | 粘性有 | しまり強い | 白色粒を少し含む。 |
| 5 | 褐色土 | 7.5YR4/4 | 粘性有 | しまり強い | 白色粒を少し含む。 |
| 6 | 褐色土 | 7.5YR6/4 | 粘性有 | しまり強い | 白色粒を微量含む。 |
| 7 | 灰褐色土 | 7.5YR2/4 | 粘性有 | しまり強い | 白色粒、焼土粒、焼土ブロック、炭化物を含む。 |
| 8 | 暗褐色土 | 7.5YR4/3 | 粘性有 | しまり強い | 白色粒、焼土粒、焼土ブロック、炭化物を多く含み、山砂を少し含む。 |
| 9 | 褐色土 | 7.5YR3/4 | 粘性有 | しまり強い | 白色粒を含む。 |
| 10 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 粘性有 | しまり強い | ローム土、白色粒を含む。 |
| 11 | 黒褐色土 | 7.5YR2/3 | 粘性有 | しまり有 | ローム土を含み、焼土粒、炭化物を少し含む。 |

0 (1:60) 2m

第8図 第1号住居跡

ピット カマド前、北よりの東壁、西壁の前にそれぞれ1基、計3基が検出された。このうち、後者2基は、位置形状からみて当住居の支柱穴と思われる。カマド前のピットは、一部カマドの袖下にかかっていたため、カマド構築以前のものと思われる。P1が40×24cmの楕円形で深さ16cm、P2が口径25cmの円形で深さ21cm、P3が53×45cmの楕円形で深さ16cmであった。P1には褐色土、P2と3には黒褐色土が堆積していた。
カマド 北壁ほぼ中央に構築されていた。壁外に35cmほど逆U字型に突出する。袖部は褐色土とにぶい黄褐色の砂質粘土を用いて造られており、両袖部の内径は54cmを測る。燃焼部から煙道部にかけて、広い範

第1号住居跡 (第8・9・10図、第3表、PL2・4)

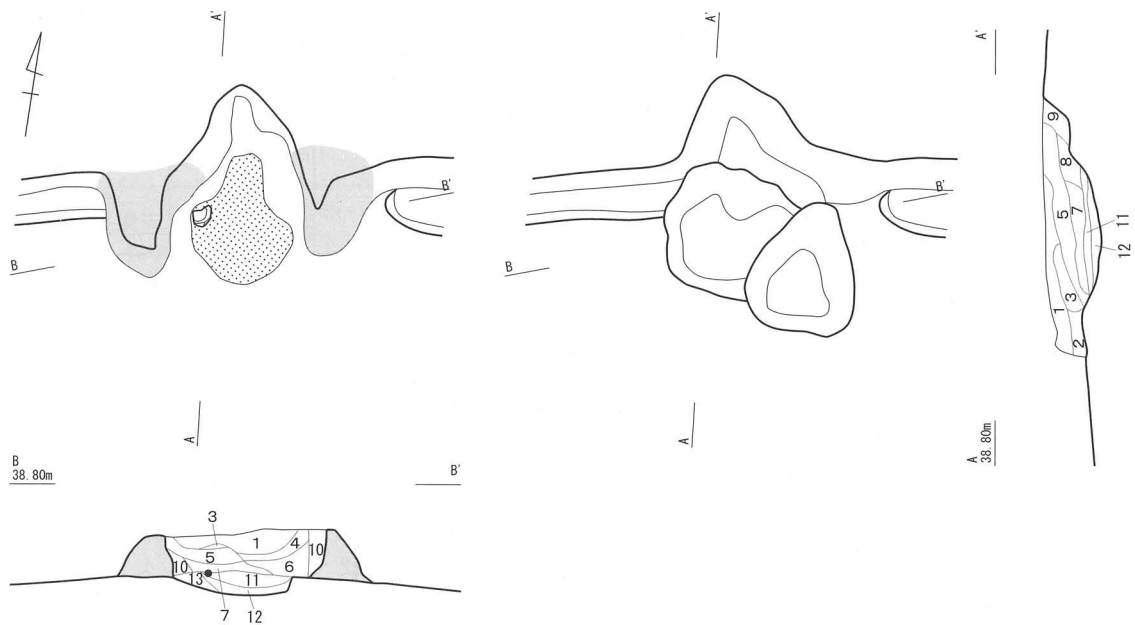
位置 調査区中央部西よりに位置する。第7号土坑を壊し、第2号土坑、第3号土坑、第8号土坑、P12、P13により壊される。

形状 上面の削平により、遺存状態はやや不良である。平面形は東西378cm、南北405cmの方形を呈する。カマドは北西側に位置し、主軸方向はN-7°-Wを示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は26cmを測る。

覆土 11層に分けられる。第10層は周溝内覆土、第11層はP2の覆土にあたる。

床面 V層中に形成されていた。全体にゆるやかに起伏を持つが、比較的堅緻である。地山が非常に堅い点から、明瞭な硬化面が確認できなかったが、カマド前は顕著に硬化していた。地山の直床であるが、北西隅や南東隅に一部褐色土を用いて貼床にしていた形跡が見られた。

カマド部分を除く全周に壁溝が検出された。幅10～58cm、深さ4～6cmを測る。



第1号住居跡カマド土層説明

1 黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり有	白色小礫、白色粒、焼土粒を少し含む。
2 暗褐色土	7.5YR3/3	粘性有	しまり有	にぶい黄褐色砂、焼土粒を含み、炭化物を含む。
3 にぶい黄褐色土	10YR3/4	粘性なし	しまりやや有	にぶい黄褐色の砂質粘土主体。天井部の崩落土。
4 黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり有	にぶい黄褐色砂、焼土粒を含む。
5 暗赤褐色土	3.5YR6/3	粘性やや有	しまりやや有	にぶい黄褐色砂を少し含み、焼土ブロックを多く含む。崩落天井部内側の被熱部分。
6 黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり有	白色粒、焼土粒、炭化物を少し含む。
7 黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり有	白色粒、焼土粒を少し含む。
8 黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり有	焼土粒、炭化物を少し含む。
9 褐色土	7.5YR3/4	粘性有	しまり有	にぶい黄褐色砂、焼土粒を少し含む。
10 暗赤褐色土	3.5YR6/3	粘性なし	しまり有	にぶい黄褐色砂を少し含み、焼土ブロックを多く含む。袖部内側の被熱部分。
11 暗赤褐色土	3.5YR6/3	粘性なし	しまりやや有	被熱ブロック主体。燃焼部。
12 暗褐色土	7.5YR4/3	粘性やや有	しまりやや有	焼土ブロックを少し含む。
13 黒褐色土	7.5YR2/3	粘性やや有	しまり有	白色粒、焼土粒を少し含む。

0 (1:30) 1m

第9図 第1号住居跡カマド

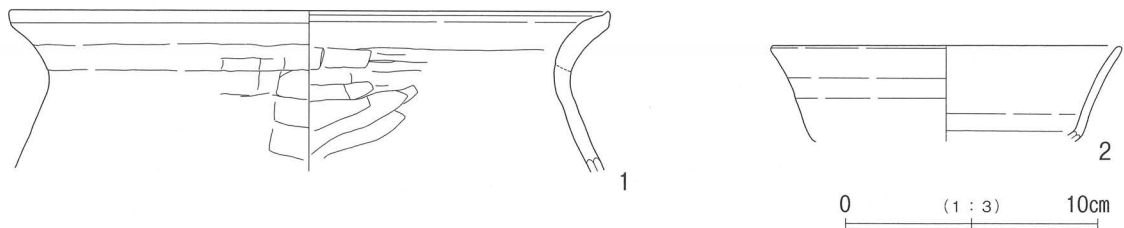
囲にわたって厚く焼土が堆積しており、長期の使用をうかがわせる。火焼面は強く赤化しており、基底部は深さ10cmほどの楕円形に掘り込まれている。覆土は13層に分けられる。第3層は、天井の崩落土と思われる。

内部施設 認められなかった。

出土遺物 土師器117片、須恵器27片、石3点が出土した。細片が多く、図示できたものは2点到留まる。

1は土師器の甕の口縁部、2は須恵器の坏である。2は体部が外反する。

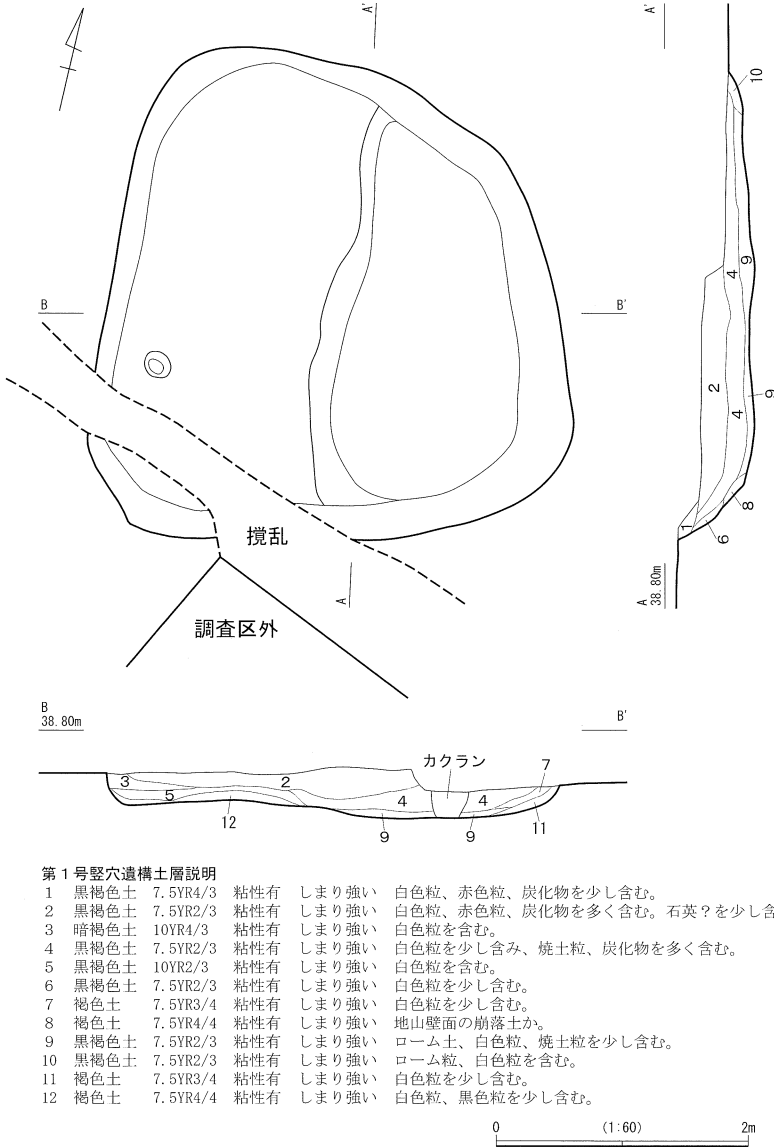
時期 伴出土器や住居の形状などから判断して、8世紀中葉の所産と考えられる。



第10図 第1号住居跡出土遺物

第3表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴	技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存度・備考	
		口径	底径高							
1	土師器甕	口径	底径高	(24.0) - <6.4>	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方につまみだされる。	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	中量の長石・石英白色粒	外内 明橙色 明橙褐色	良好	口縁～体部片
2	須恵器坏	口径	底径高	(14.0) - <3.8>	体部は外反する。	体部はロクロナデ。	中量の長石・石英白色粒	外内 灰白 灰白	不良	口縁～体部片 8C前



第1号竪穴遺構土層説明

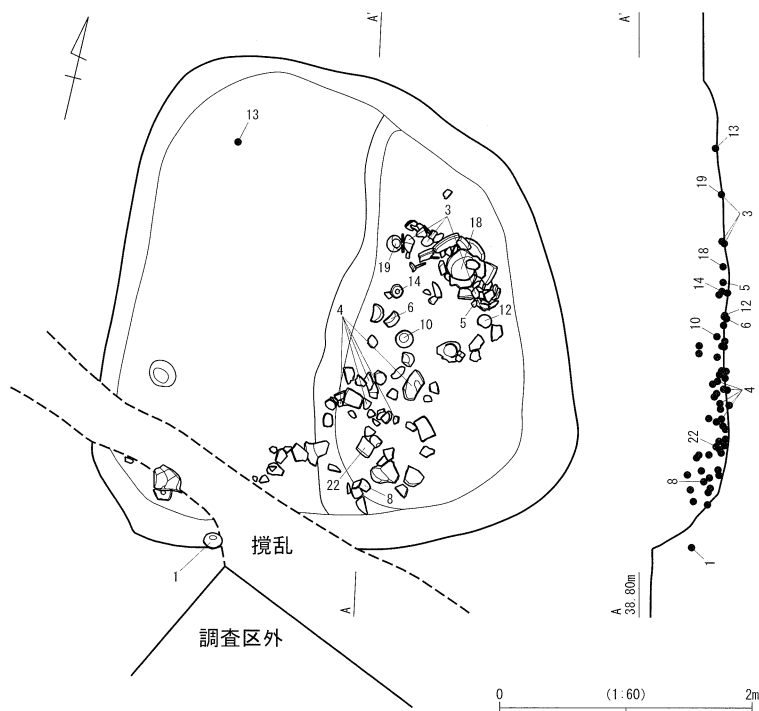
1	黒褐色土	7.5YR4/3	粘性有	しまり強い	白色粒、赤色粒、炭化物を少し含む。
2	黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり強い	白色粒、赤色粒、炭化物を多く含む。石英?を少し含む。
3	暗褐色土	10YR4/3	粘性有	しまり強い	白色粒を含む。
4	黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり強い	白色粒を少し含む、焼土粒、炭化物を多く含む。
5	黒褐色土	10YR2/3	粘性有	しまり強い	白色粒を含む。
6	黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり強い	白色粒を少し含む。
7	褐色土	7.5YR3/4	粘性有	しまり強い	白色粒を少し含む。
8	褐色土	7.5YR4/4	粘性有	しまり強い	地山壁面の崩落土か。
9	黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり強い	ローム土、白色粒、焼土粒を少し含む。
10	黒褐色土	7.5YR2/3	粘性有	しまり強い	ローム粒、白色粒を含む。
11	褐色土	7.5YR3/4	粘性有	しまり強い	白色粒を少し含む。
12	褐色土	7.5YR4/4	粘性有	しまり強い	白色粒、黒色粒を少し含む。

第11図 第1号竪穴遺構

第1号竪穴遺構(第11・12・13・14図、第4・5表、PL2・3・4・5・6)
位置 調査区南端に位置する。南部コーナー付近を現代の攪乱により東西に寸断されている。
形状 上面の削平により、遺存状態はやや不良である。平面形は東西377cm、南北390cmの不整な方形を呈する。主軸方向はN-6°-Wを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は55cmを測る。
覆土 12層に分けられる。
床面 V層中に形成されていた。西半部はほぼ平坦であるが、中央部を境に東側が10~15cmほど低くなっている。南西の一角は、やや起伏をもつ。明瞭な硬化面は検出されなかった。
ピット 南西隅に1基検出された。口径24cm、深さ15cmを測る。黒褐色土(7.5YR1/3 粘性しまり有 白色粒を含み、焼土粒、炭化物を少し含む)が堆積していた。
内部施設 認められなかった。
出土遺物 土師器1634片、須恵器826片、縄文土器3片、石24点が出土した。今回の調査全体で出土した遺物の実に9割を占める。図示したものは23点で、8世紀前半、中葉、後半とやや幅を持つ3期のものが認められるが、多くが覆土下層から床面直上に混在した状態で出土した。1~9、13、18は8世紀前半で比率の多くを占める。10、15は8世紀中葉、11、16、17は後半と推定される。

1、2の土師器の坏は底部が丸底で、古墳時代的な特徴を残す。確認面上の出土ではあるが、24も同様の特徴を持つ。13~14の須恵器の蓋は、かえしを持つ。18は鉢、19は小壺、21は小型の甕、23は円面硯体部から底部と考えられる破片であり、硯面は貼り付けで底部に帯を持つ。体部に工具によるしるしがある。

時期 伴出土器から、遺物の主体は8世紀前半を指し示すものの、出土状況から8世紀後半を下限とする時期の所産と考えられる。



第12図 第1号竪穴遺構遺物分布図

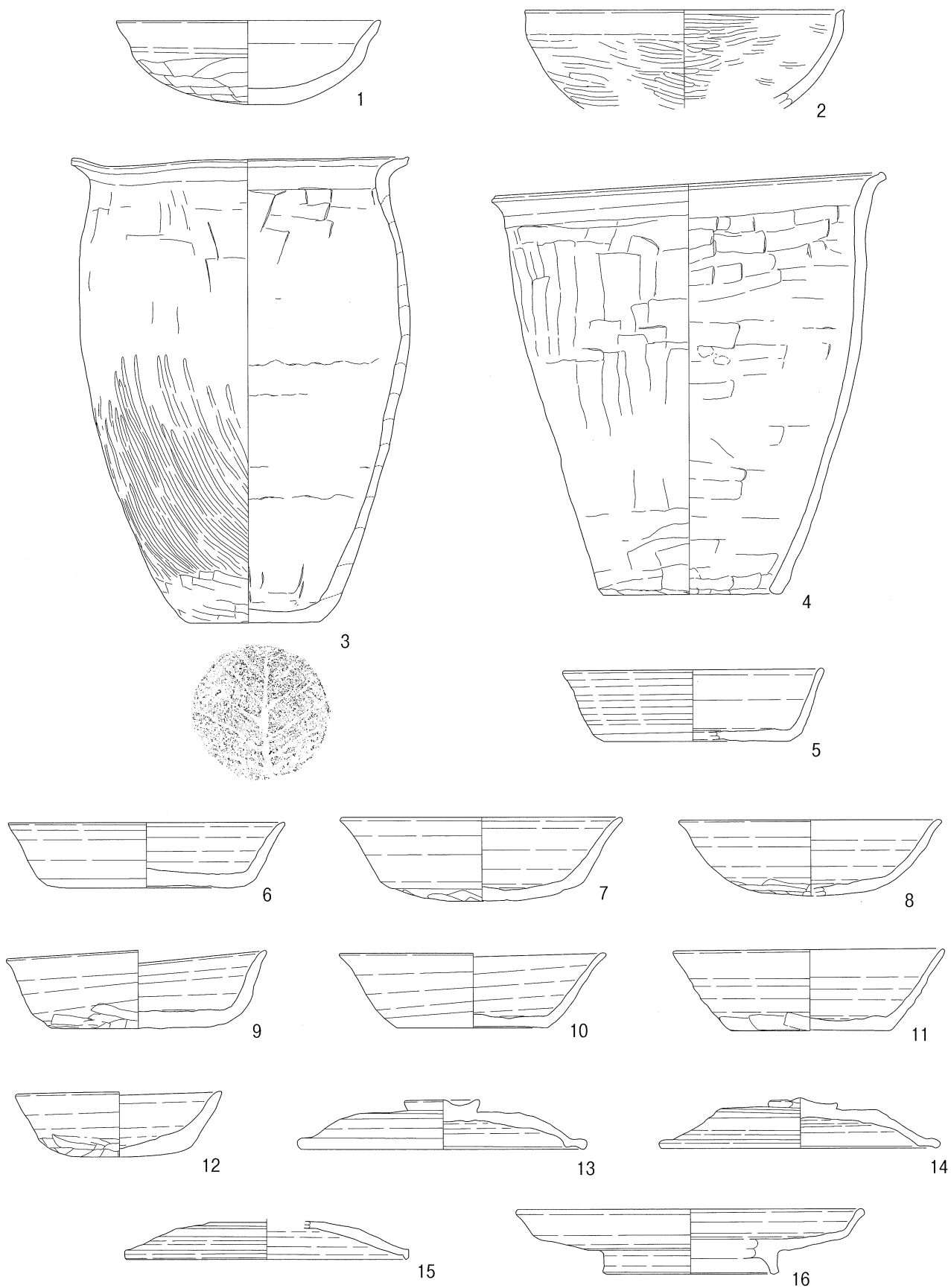
第4表 第1号竪穴遺構出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存度・備考
1	土師器 坏	口径 底器 器高	14.0 - 4.5	底部は丸底で体部は内湾して立ち上がり。口縁部は外反する。	外：口縁部ヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ。	少量の石英・白色粒	外内 明橙色 明橙色	良好 3/4存 8C前
2	土師器 坏	口径 底器 器高	(17.0) - <5.3>	体部は内湾し、口唇部は弱く「く」の字状に外反する。	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内面：ヨコナデ後ヘラミガキ。 内外面に赤彩。	中量の石英・白色粒	外内 橙色 橙色	良好 口縁～体部片 1/4存 8C前
3	土師器 甕	口径 底器 器高	23.9 9.0 33.2	胴上半部に最大径をもち、口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は上方につまみだされる。	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ヘラケズリ。体部下半ヘラケズリ後ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。底部：木葉痕。	多量の長石・石英白色粒	外内 明橙褐色 明橙褐色	良好 ほぼ完形 8C前
4	土師器 甌	口径 底器 口径 器高 口径 口径 口径	(28.0) (12.7) 30.0 (9.5)	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方につまみだされる。	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。指頭。底部ヘラケズリ。単孔	中量の長石・石英白色粒	外内 明橙色 明橙色	良好 1/2存 8C前
5	須恵器 坏	口径 底器 器高	(13.9) 9.8 3.9	底部は平底で、体部は直線状に立ち上がる。	体部ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。底部中央に粘土紐巻き上げ痕がみられる。	中量の長石・雲母石英	外内 灰色 灰色	良好 3/4存 8C前
6	須恵器 坏	口径 底器 器高	(14.8) (10.0) 3.5	底部は平底で直線状に立ち上がる。	体部ロクロナデ。底部外周は回転ヘラケズリ。内側は手持ちヘラケズリ。	中量の雲母・石英少量の白色粒	外内 灰色 灰色	良好 1/2存 8C前
7	須恵器 坏	口径 底器 器高	(15.0) (9.0) 4.5	底部はふくらみの弱い丸底で、体部は外反する。	体部ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ。	多量の雲母・石英白色粒	外内 灰白色 明灰色	やや不良 1/2存 8C前?
8	須恵器 坏	口径 底器 器高	(14.0) (6.0) 4.1	底部はふくらみの弱い丸底。体部は内湾して立ち上がり、口唇部は外反する。	体部ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ。	中量の長石・雲母石英	外内 灰白色 灰白色	やや不良 1/2存 8C前
9	須恵器 坏	口径 底器 器高	13.8 9.0 4.2	底部は平底。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部で外反する。	体部ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ。	多量の雲母中量の長石・白色粒	外内 灰色 灰白色	良好 4/58C前

10	須恵器 杯	口径 底器	径 径高	14.2 7.9 4.0	底部は平底。体部は直線状に立ち上がり、口唇部はやや外反する。	体部ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。	中量の長石・石英白色粒	外内	灰白色 灰白色	良好	ほぼ完形 8C中	
11	須恵器 杯	口径 底器	径 径高	14.5 8.5 4.4	底部は平底で体部は直線に立ち上がる。	体部ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ。	中量の長石・白色粒	外内	灰色 灰色	良好	3/4存 8C後	
12	須恵器 杯	口径 底器	径 径高	11.0 6.2 3.5	底部は平底で体部は内湾気味に立ち上がる。	外・内面ともヨコナデ。外面底部手持ちヘラケズリ。	中量の長石・白色粒	外内	灰色 灰色	良好	4/5存	
13	須恵器 蓋	口径 かえり つまみ 器	径 径高	15.2 13.0 4.0 2.7	取手はつぶれた「ギボシ」状。かえしを有する。	体部ロクロナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ。	中量の長石。少量の雲母・石英・白色粒	外内	灰白色 灰白色	良好	完形 8C前	
14	須恵器 蓋	口径 つまみ 器	径 径高	(15.0) 3.6 2.7	取手はつぶれた「ギボシ」状。わずかなかえしをもつ。	体部ロクロナデ。外面天井部回転ヘラケズリ。	中量の長石・白色粒	外内	灰色 灰色	良好	1/2存	
15	須恵器 蓋	口径 底器	径 径高	(15.0) -	(2.0)	口唇部は面をなす。かえしは認められない。	体部ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。	中量の長石・白色粒少量の石英	外内	灰色 灰色	良好	1/4存 8C中
16	須恵器 高台付 盤	口径 底器	径 径高	(18.5) (9.4) 3.5	高台はやや開く「ハ」の字状。口唇部は肥厚し外反する。	体部ロクロナデ。高台貼り付け。	少量の長石・雲母・黒色粒	外内	灰白色 灰白色	良好	1/3存 8C後	
17	須恵器 高台付 盤	口径 底器	径 径高	(21.5) 12.0 4.5	高台はわずかに開く「ハ」の字状をなす。体部は内湾気味に立ち上がる。内面体部に稜をもつ。	体部ロクロナデ・高台貼り付け。	中量の長石・白色粒	外内	明灰色 明灰色	良好	1/2存 8C後	
18	須恵器 鉢	口径 底器	径 径高	41.0 10.6 19.2	底部は平底。体部は内湾に立ち上がり、口縁部は、ほぼ直角に外側に折れ曲がる。	外面：平行文のタタキ。体部下半ヘラケズリ。内面：口縁部ロクロナデ。体部ヘラナデ。	多量の長石・石英白色粒	外内	灰白色 灰白色	やや不良	3/4存 8C前	
19	須恵器 小壺	口径 底器	径 径高	6.7 6.9 8.2	底部は平底で最大径を体部中位にもつ。口縁部は直線状に立ち上がる。	体部ロクロナデ。底部ヘラケズリ。	多量の長石・石英白色粒	外内	灰白色 灰白色	やや不良	ほぼ完形	
20	須恵器 甕	口径 底器	径 径高	- (18.0) <27.0>	体部：内湾して立ち上がる。	外面：平行文のタタキ。内面：一部に同心円状のタタキ。	多量の雲母中量の長石・石英	外内	灰色 灰色	良好	体部8C	
21	須恵器 甕	口径 底器	径 径高	(15.6) -	<5.0>	口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部に弱い沈線が認められる。	外面：ヨコナデ。内面：ヘラナデ。	中量の長石・白色粒	外内	灰色 灰色	良好	口縁部片
22	須恵器 甗	口径 底器	径 径高	(27.0) (13.0) 24.0	体部は内湾して立ち上がり、口縁部ではほぼ直角に外に折れ曲がる。	外面：体部平行文のタタキ。体部下半ヘラケズリ。内面：口縁部ロクロナデ。体部ヘラナデ及び、指頭、体部下半ヘラケズリ。	中量の長石・石英白色粒	外内	灰色 灰色	良好	1/4存	
23	須恵器 円面硯	口径 底器	径 径高	(41.0) <11.0>	底部に帯を有する。硯面は貼り付け。	体部ロクロナデ。体部に工具によるしるしが施される。	中量の長石・石英白色粒	外内	明灰色 明灰色	良好	体部～底部片	

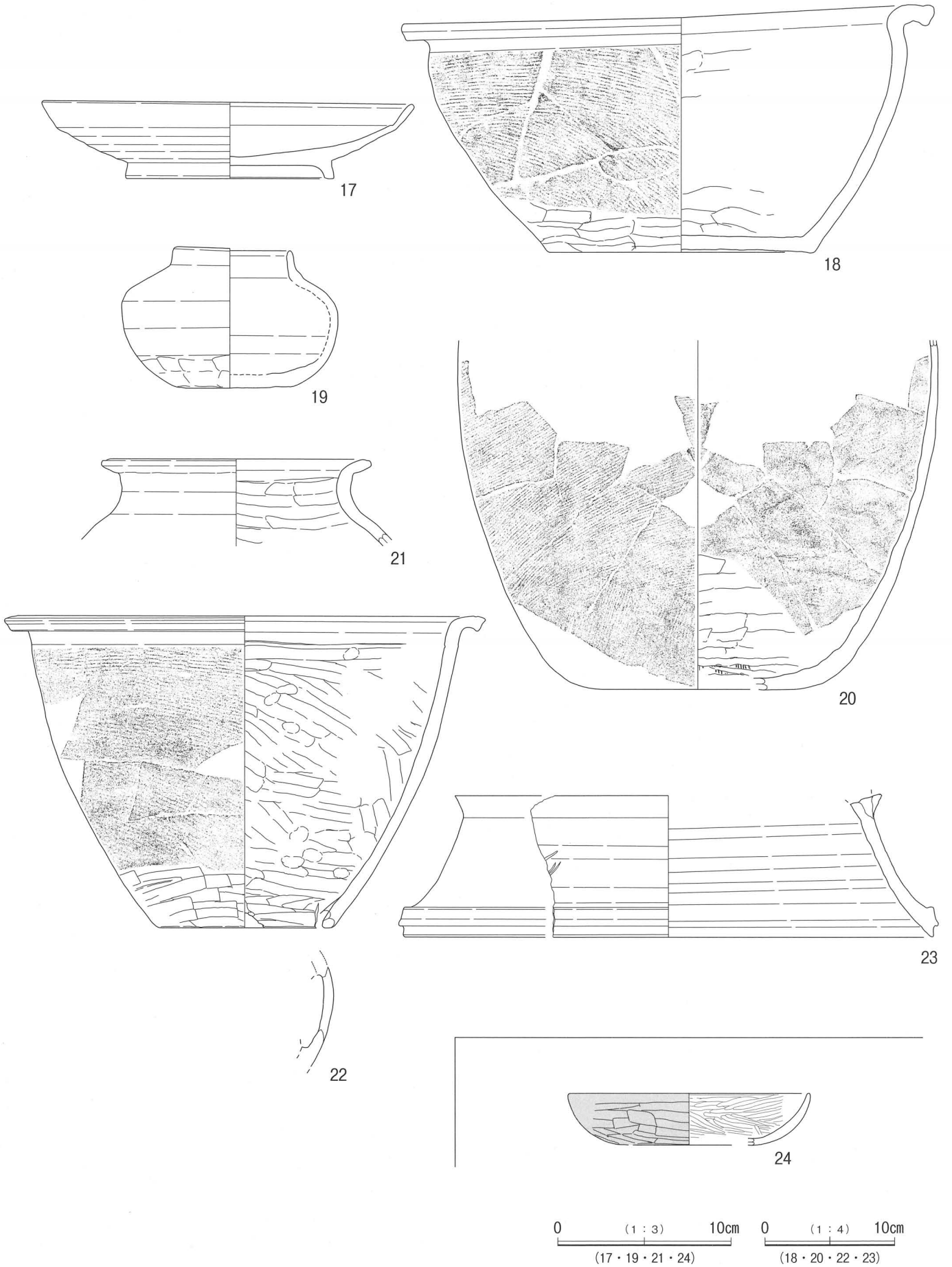
第5表 遺構外出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存度・備考				
24	確認面	土師器 杯	口径 底器	径 径高	(14.0) -	<3.0>	体部は内湾気味に立ち上がる。	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面：ヘラミカキ。外面に赤彩。	中量の長石・白色粒	外内	明赤褐色 明黒褐色	良好	口縁～体部片 8C前



0 (1:3) 10cm 0 (1:4) 10cm
 (1·2·5~16) (3·4)

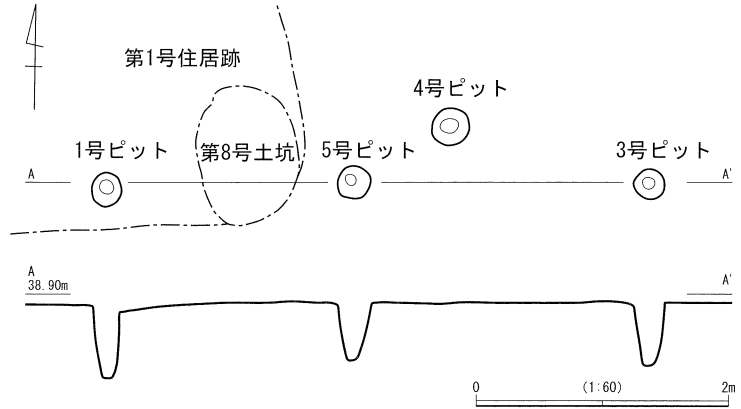
第13図 第1号竖穴遺構出土遺物(1)



第 14 図 第 1 号竖穴遺構出土遺物 (2)・遺構外出土遺物

第1号柱穴列跡 (第15図、PL1)

調査区中央北東よりに、東西方向に一列に並ぶ1、3、5号ピットは、平面形が円形で口径が25～28cm、深さ40～50cmとほぼ同規模であり、柱間がおよそ2m程度と規則性が認められるが、建物跡としては明確ではないため柱穴列跡とした。このうち、1号ピットには拳大、5号ピットには掌大の石が底面近くから検出され、大きさからいっても自然の営力によるものとは考えにくく、根石のような役割で

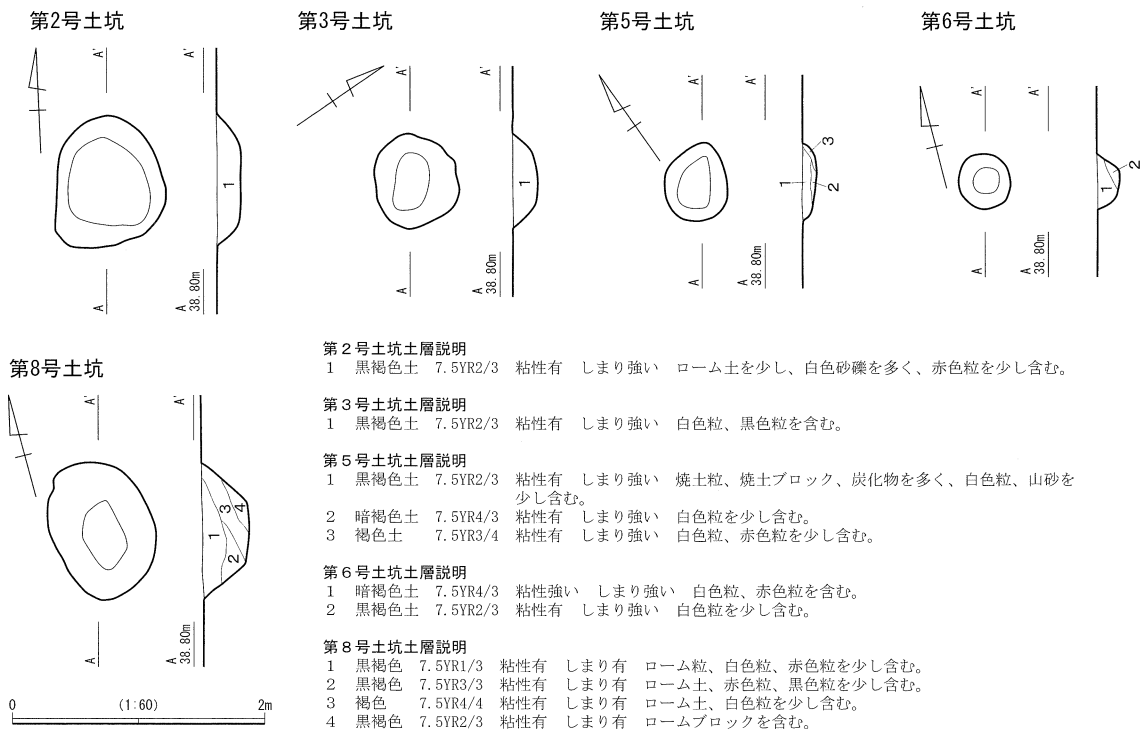


第15図 第1号柱穴列

人為的に入れたとも考えられる。遺物の出土はみられなかったが、1号ピットは第1号住居跡の覆土・床面を掘りぬき構築されていることから、柱穴列が当住居に後出するものである。覆土や配列から、第1号竪穴遺構と同時期以降の所産と思われる。

第2号土坑 (第16図、PL3)

調査区中央に位置する。第1号住居跡及び第7号土坑を壊している。平面形は楕円形を呈し、長軸104cm、短径87cm、深さ17cmを測る。主軸方位は、である。断面は皿状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は平坦である。覆土は単一層であった。遺物の出土はみられなかった。覆土から、第1号竪穴遺構と同時期の所産と思われる。



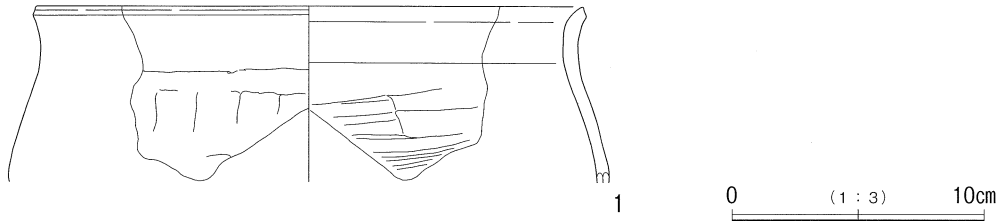
第16図 第2・3・5・6・8号土坑

第3号土坑（第16図、PL3）

調査区中央北よりに位置する。第1号住居跡の覆土を掘り込み構築されている。平面形は楕円形を呈し、長軸76cm、短軸70cm、深さ15cmを測る。主軸方位は、である。断面は鍋底状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底は丸みを持つ。覆土は単一層であった。遺物は、土師器7片が出土した。覆土と伴出土器から、第1号竪穴遺構と同時期の所産と思われる。

第5号土坑（第16・17図、第6表、PL3・6）

調査区中央西端に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸62cm、短軸49cm、深さ12cmを測る。主軸方位は、である。断面は皿状を呈し、壁は比較的緩やかに掘り込まれている。坑底は平坦である。覆土は3層に分けられ、焼土と炭化物を多量に含む。遺物は、土師器13片が出土した。図示したものは1点で、1は土師器の甕である。覆土と伴出土器などから第1号竪穴状遺構と同時期の所産と思われる。



第17図 第5号土坑出土遺物

第6表 第5号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)		器形の特徴	技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存度・備考
		口径	底径高						
1	土師器 甕	口径	(21.8) - <7.0>	口縁部は直線状に立ち上がり、口唇部は上につまみだす。	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	多量の石英 中量の雲母・白色粒	外 におい褐色 内 におい褐色	良好	口縁～体部片

第6号土坑（第16図、PL3）

調査区南西、第1号竪穴遺構に近接して位置する。平面形は円形を呈し、長軸44cm、短軸41cm、深さ18cmを測る。主軸方位は、である。断面は鍋底状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底はおおむね平坦である。覆土は2層に分けられる。遺物は、土師器1片が出土した。覆土と伴出土器などから、第1号竪穴状遺構と同時期の所産と思われる。

第8号土坑（第16図、PL3）

調査区中央に位置する。第1号住居跡の覆土を掘り込み構築されている。平面形は楕円形を呈し、長軸111cm、短軸80cm、深さ34cmを測る。主軸方位は、である。断面は鍋底状を呈し、壁は急傾斜で掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。

覆土は4層に分けられる。遺物は土師器2片、須恵器3片、石1点が出土した。覆土や伴出土器から、第1号住居廃絶後、それほど遠くない時期の所産と思われる。

ピット（第4図、第7表）

調査区中央部を中心に、10基が検出された。このうち、中央に位置する6号ピットは規模が大きく、また、底面に明確な柱痕の窪みが認められたが、並ぶものが確認されなかったため、その性格は不明である。7～11号ピットは、口径・深さとも浅く、配列も不規則である。12、13号ピットは、第1号住居跡の覆土を掘り込んで構築されていた。第1号堅穴遺構と同様の覆土が堆積しており、いずれも同時期以降の所産と思われる。

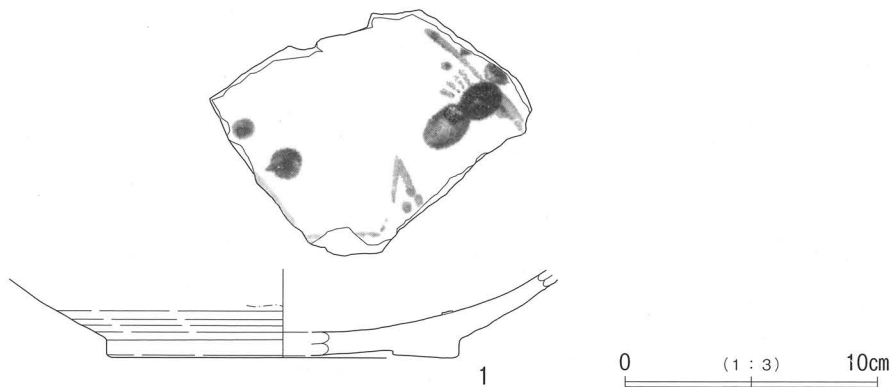
第7表 ピット一覧表

ピット番号	形状	規模（長軸×短軸×深さcm）	覆土	ピット番号	形状	規模（長軸×短軸×深さcm）	覆土
1号ピット	円形	28×24×47	黒褐色	8号ピット	円形	21×19×12	黒褐色
2号ピット	不明	36×35×12	黒褐色	9号ピット	円形	20×18×18	黒褐色
3号ピット	円形	25×24×50	黒褐色	10号ピット	円形	20×18×10	黒褐色
4号ピット	円形	32×29×15	黒褐色	11号ピット	円形	23×21×20	黒褐色
5号ピット	円形	28×26×40	黒褐色	12号ピット	円形	26×25×15	黒褐色
6号ピット	楕円形	36×31×64	黒褐色	13号ピット	円形	27×26×40	黒褐色
7号ピット	円形	23×21×22	黒褐色				

3. 近世以降

第1号溝（第4・18図、第8表、PL3・6）

調査区北よりを東西に横断する。両端は調査区外にかかるため、全容は不明であるが、確認部分の全長11m、上面幅95～148cm、底面幅23～39cm、深さ36cmを測る。表土第Ⅱ層上面より掘り込まれており、砂とロームブロックで人為的に埋められていた。このことは、本址が比較的新しい時期の所産であることを指し示すことから、明瞭に遺構としてはとらえず、念のため3ヵ所を掘削して様相を確認した。遺物は陶器2片が出土した。図示したものは1点で、1は19世紀の瀬戸美濃系の陶器製大鉢である。



第18図 第1号溝出土遺物

第8表 第1号溝出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存度・備考
1	陶器大鉢	口径 底器高	内外面に灰釉。底部無釉。内面に「梅の木」の文様を染付。	削りだし高台。	乳白色		良好	瀬戸美濃系19C

第4章 総括

小野大道西遺跡は、三方向を筑波山塊の山々に囲まれた小盆地状地形の奥に、北に山を背負い、南に緩やかに傾斜しながら沖積低地に面する台地上に位置する。

この小盆地の山裾には7世紀から9世紀にかけて操業した「新治須恵器窯跡群」が点在し、また、いずれも8世紀末から9世紀初頭の開創を所伝とする東城寺、清滝寺、日枝神社などの寺社が鎮座する特徴的な立地である。

今回の調査では、縄文時代の土坑3基のほか、8世紀前半を中心とする竪穴住居跡1軒、竪穴遺構1基、土坑5基、ピット13基を確認できた。北から東、南の3方向が土地改良などにより大きく削平されて本来の遺構群の広がりが不明確であり、かつ調査面積も僅かであるという制約を踏まえつつ、南に隣接する第1次調査地点の成果も合わせて当地における土地利用の変遷を辿ってみたい。

縄文時代の落とし穴と思われる4号土坑や、同時期の木痕と推定される7号土坑、加曽利E式土器片の出土した1号土坑は、この地が当該期狩猟の場であったことを示唆するものである。

続く弥生、古墳時代の痕跡は見出されなかったが、8世紀前半ごろ、この地に集落が形成される。

第1次発掘調査では、2間×2間の側柱の掘立柱建物や、これと柱間や方向を一にする柱穴列3ヵ所のほか、竪穴遺構や土坑が確認された。そしてこれらが関連性を持ち構築された可能性が指摘され、出土遺物から8世紀前半を中心に9世紀におよぶ年代が与えられている（関口2009）。

今回確認された第1号住居跡や第1号竪穴遺構は、主軸方向がN-6~7°-Wを示し、第1次調査の掘立柱建物がやはりN-6°-Wであること、互いが重複せずに距離をとって配置されていること、出土遺物の年代が同時期のものが大半である点などから、第1次調査地点の遺構と同様、8世紀前半ごろに一定の計画性をもって形成された同一の集落であるとの想定が可能であろう。第1号竪穴遺構は、今回の調査で出土した収納箱4箱ぶんの遺物の大半を包蔵しており、それが8世紀前半を中心に8世紀後半までの幅を持ち、覆土最下層から床面直上に一括廃棄された状態で出土した点、特異な平面構造と共にその性格が目される遺構である。

遺物の様相については、須恵器の大半が長石、石英、雲母粒を含む新治産須恵器と推定され、明瞭な非在地製品は見出されなかった。また、第1号竪穴遺構より円面硯と考えられるものが出土しており、集落の性格を考える上で興味深い。

限定された調査範囲内でのまとめになるが、小野大道西遺跡における奈良・平安時代の集落は、南に2間×2間の掘立柱建物やこれと東西方向を同じくする柱穴列群、北に10mほどの位置に廃棄土坑として利用されていた第1号竪穴遺構、その北6mに第1号竪穴住居が位置するという空間構造が明らかになった。住居の埋没後に東西方向の柱穴列が作られるなど若干の重複が見られるものの、主軸方向の統一性と遺物の年代から、各遺構は概ね並存関係にあったと思われる。

この集落の下限については、第1次調査での柱穴列から出土した須恵器蓋などから、8世紀後半から9世紀前半と想定されるが、限定された調査範囲内での推測に過ぎない。なお、小高地区に隣接する田宮裾の宮遺跡では、古墳時代前期を最後に途絶えていた集落が、8世紀中ごろに再び形成されるが、近接する田宮窯跡の操業とのかかわりが指摘されており興味深い（高野・土生2001）。

これ以降、上部の削平に起因する可能性もあるものの、長期にわたり生活の痕跡は見られず、近代に入り畑地として区画溝などが造られ、現在に至ったものと思われる。

今回の調査地及びその周辺の小野、東城寺、小高地区には、新治須恵器窯跡群や、古代に開創伝承を持つ寺社が多く存在するが、若干の例を除き、調査例がほとんどなく未解明な点が多い。このような状況下、今回の調査で時間軸を一にする奈良・平安時代の集落の、一端を明らかにできた意義は大きいものとする。

参考文献

- 赤井博之 1997 「新治窯圧群の基礎的研究－奈良・平安時代の須恵器編年について－」（『土曜考古』第21号 土曜考古研究会）
1998 「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究（1）～奈良・平安時代の須恵器編年を中心に～」（『姿良岐考古』第20号 姿良岐考古同人会）
- 浅井哲也 1991 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」（『研究ノート』1号 財団法人茨城県教育財団）
1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」（『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団）
- 浅野和久 2003 『岡の宮遺跡』国補特－第14－03－064－0－052号埋蔵文化財調査報告 茨城県教育財団文化財調査報告第205集 財団法人茨城県教育財団
- 茨城県考古学協会シンポジウム実行委員会 2005 『古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸の国河内郡を中心として－』茨城県考古学協会
- 檜村宣行 1992 「茨城県南部における鬼高式土器について」（『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団）
- 窪田恵一 鶴町明子 本田信之 橋場君男 福田礼子 1998 『神明遺跡（第1次・第2次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 土浦市遺跡調査会
- 佐々木藤雄・小野麻人・石橋 充 2009 『谷田部本郷西遺跡』沼尻産業株式会社 株式会社東京航業研究所 つくば市教育委員会
- 関口 満 福田礼子 吉沢 悟 日高 慎 1997 『根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書』土浦市今泉霊園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書 土浦市遺跡調査会
- 関口 満 福田礼子 2007 『諏訪窪遺跡』保育園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 社会福祉法人幸樹会 土浦市教育委員会 諏訪窪遺跡調査会
- 関口 満 2009 「小野大道西遺跡－市道新治Ⅰ級14号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告－」（『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第15号 上高津貝塚ふるさと歴史の広場）
- 高野浩之 土生朗治 2001 『茨城県新治村 田宮梶の宮遺跡－発掘調査報告書－』田宮梶の宮遺跡発掘調査会
- 新治村史編纂委員会 1986 『図説新治村史』新治村教育委員会

報告書抄録

ふりがな	おのおおみちにしいせき (だいにじちょうさ)							
書名	小野大道西遺跡 (第2次調査)							
副書名	国補公街委第1号 市道新治I級 14号線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野麻人・関口 満							
編集機関	株式会社東京航業研究所							
所在地	〒350-0855 埼玉県川越市伊佐沼 28 番 1 号 ☎ 049-229-5771							
発行年月日	西暦 2010 年 (平成 22 年) 3 月 12 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
おのおおみちに しいせき 遺跡	いばらきけんつちうらしおの 茨城県土浦市小野 1378 番地	465	081	36° 09' 54"	140° 09' 55"	2009.10.14 ～ 2009.11.6	201.751 m ²	市道新治 I 級 14 号線改良事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小野大道西 遺跡	集落跡	縄文時代	土坑 3 基		縄文土器 土 製品 石器		落し穴と木痕、中期の土坑。	
		奈良・ 平安時代 以降	竪穴住居跡 1 軒 竪穴遺構 1 基 柱穴列跡 1 ヶ所 土坑 5 基など		土師器 須恵 器		北西にカマドを持つ住居跡。 竪穴遺構は、大量の土師器・ 須恵器の検出から廃棄土坑と しての性格と、建物としての 使用の可能性を持つ。柱穴列 跡と共に、第 1 次調査地点の 掘立柱建物や柱穴列と主軸方 向が一致。	
	近世以降	溝 1 条		陶器				
要約	筑波山塊裾部の緩斜面に形成された 8 世紀前半を中心とする集落。第 1 号住居は、北西にカマドを持つ。第 1 号竪穴遺構は、不整な方形で、西半部が床状、東半部が一段低い構造となり、そこを中心にして 8 世紀代の幅を持つ大量の土師器・須恵器が投棄されていた。いずれも南に隣接する第 1 次調査の掘立柱建物や柱穴列と主軸方向が一致し、強い企画性が見られる。これらの遺構は、当該期の集落を形成するものと思われる。また、縄文時代の落し穴と木痕、中期の土坑が確認され、この時期の人の営みがうかがわれる。							

写真図版



調査区全景（北より）



調査区全景（南東より）



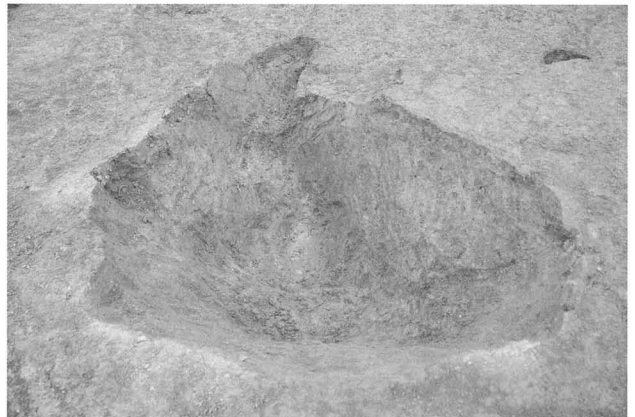
調査前風景（南西より）



第1号土坑全景（東より）



第4号土坑全景（東より）



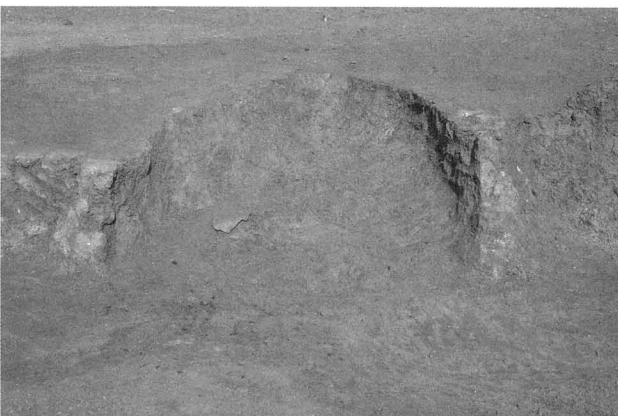
第7号土坑全景（南より）



第1号住居跡全景（南より）



第1号住居跡全景（東より）



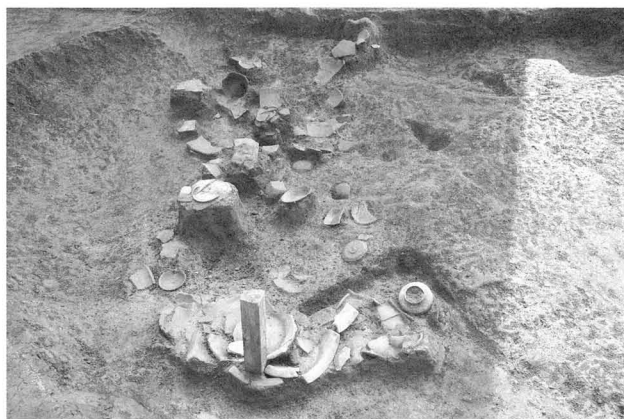
第1号住居跡カマド（南より）



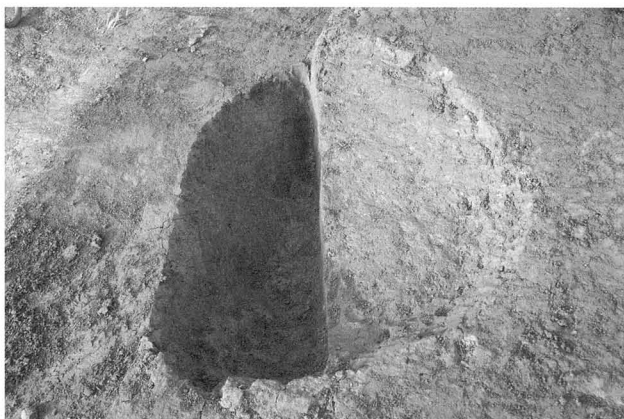
第1号竪穴遺構全景（南より）



第1号竖穴遺構遺物出土状況（東より）



第1号竖穴遺構遺物出土状況（北より）



第2号土坑全景（南より）



第3号土坑全景（南より）



第5号土坑全景（東より）



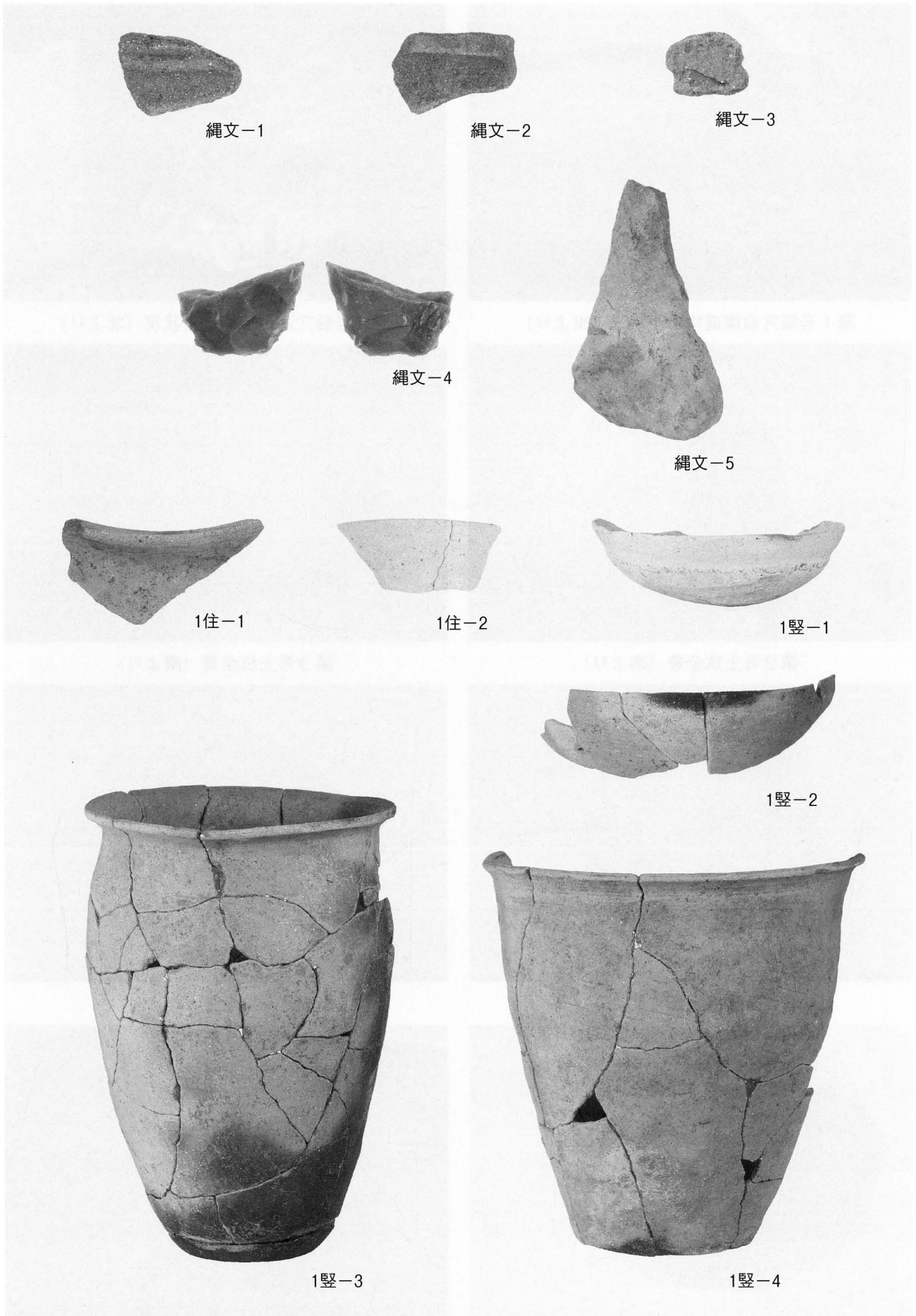
第6号土坑全景（東より）



第8号土坑全景（東より）



第1号溝全景（東より）



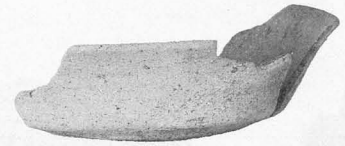
出土遺物 (1)



1豎-5



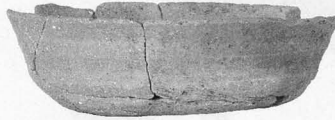
1豎-6



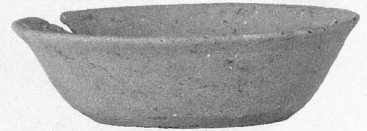
1豎-7



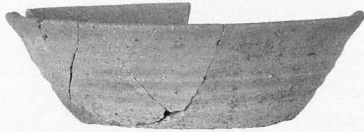
1豎-8



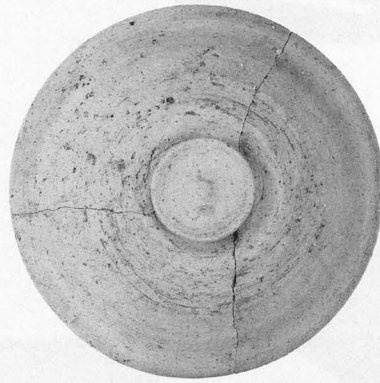
1豎-9



1豎-10



1豎-11



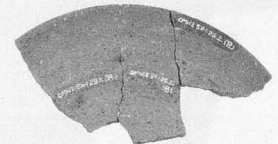
1豎-13



1豎-14



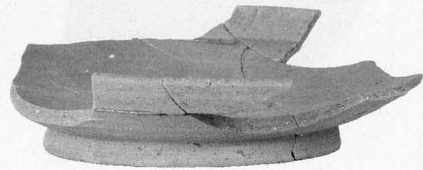
1豎-12



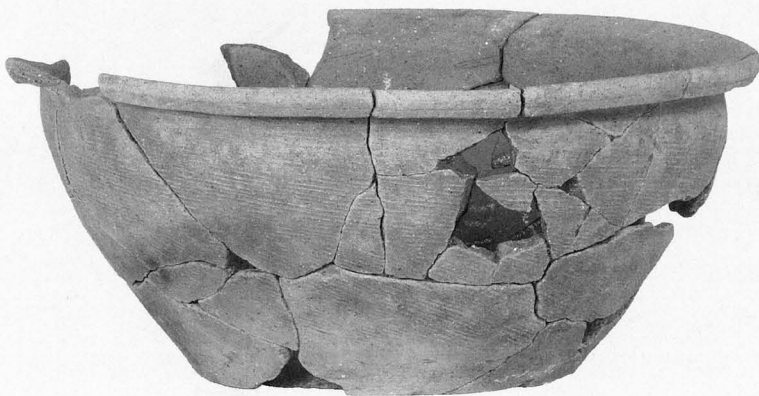
1豎-15



1豎-16



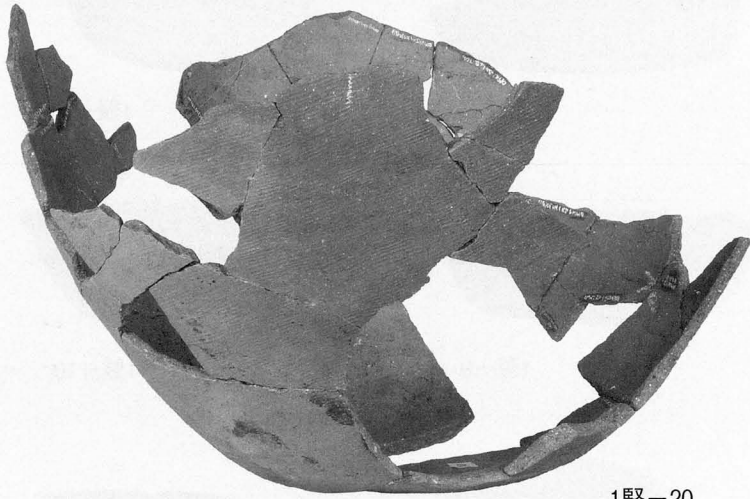
1豎-17



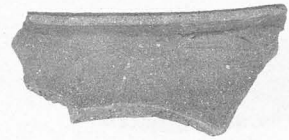
1豎-18



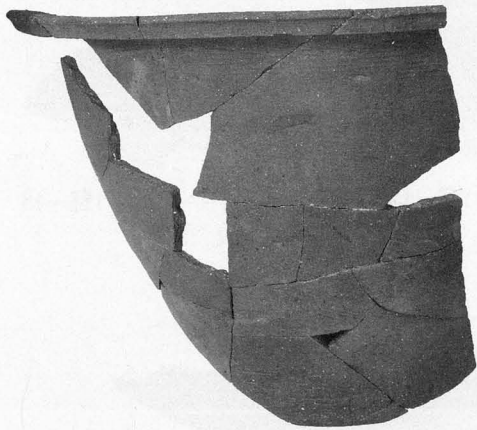
1豎-19



1豎-20



1豎-21



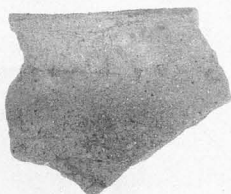
1豎-22



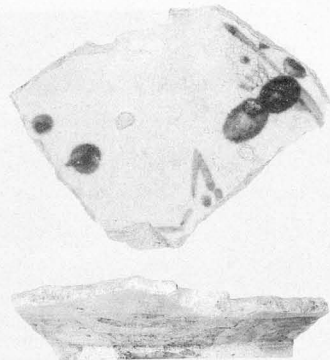
1豎-23



遺構外-24



5土-1



1溝-1

小野大道西遺跡（第2次調査）

— 国補公街委第1号 市道新治I級14号線
改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷 平成22年3月12日

発行 平成22年3月12日

編集 株式会社東京航業研究所
埼玉県川越市伊佐沼28-1
TEL 049-229-5771

発行 土浦市
土浦市教育委員会
株式会社東京航業研究所

印刷 関東図書株式会社
埼玉県さいたま市南区別所3-1-10
TEL 048-862-2901